

小児科だより vol.45

予防接種をおくらせた方がいゝですか？

2020.5.1 発行

こんにちは。日を迫うごとに日差しが強くなり、新緑の季節となって参りました。御前崎周辺のお茶畑も新芽がぐんぐん伸びており、この便りがお手元に届くころには、まさしく一番茶の収穫時期を迎えているのではないのでしょうか。



さて、今月の小児科だよりも、先月に続いて新型コロナウイルスに関する話題です。小児の患者数は成人と比較して圧倒的に少なく、情報が少ないため様々な誤解も生じております。子どもの新型コロナウイルス感染症に関して、日本小児科学会が Q&A 形式で症状や注意点に関して説明しています。受診の必要性や集団保育に関する一般的な注意点など、適宜更新されておりますので、小児科学会のホームページを参考にさせていただきますと幸いです。今回は、その中からタイトルにもある予防接種に関する質問について、お話しさせていただきます。

新型コロナウイルス感染症を予防するための対策も重要ですが、極端な制限によって予防できるほかの重要な病気の危険性にさらされることを避ける必要があります。今後も数か月単位での流行が想定され、その間に予防接種を回避するデメリットは大きいと考えます。たいていの医療機関（小児科）では、特別な時間枠を設けて予防接種や乳児健診を行っており、発熱など何らかの症状がある子と一緒に待たずに済むようになっています。実際に子どもの肺炎球菌菌血症や Hib 菌血症は決してまれではありませんし、百日咳や水痘および結核は静岡県内で今年（4月）中も報告例がでています。つまり、予防接種の接種率低下による被害の方が、新型コロナによる影響よりも明らかに大きくなります。

現在、日本では緊急事態宣言により、外出の自粛が求められておりますが、予防接種を受けるために医療機関を受診することは、『不要不急の外出』には含まれません。ちょうど私がこの原稿を書いている、4/29にNHKでは、『子どもの予防接種は不要不急ではない』旨の特集ニュースを放送していました。それだけ誤解されている方が多いということだと思いますし、実際に外来で同様のご質問やご相談を受けることが増えています。

最後に繰り返しのようになりますが、定期接種のワクチンが防ぐ病気には、かつて乳幼児が命を失っていたようなものも多く、現在でも一定の頻度で、致命的になったり、後遺症を残すものが含まれています。子どもにとって、予防接種は不要不急ではありません。一般的な感染対策に加えて、現在はさらに感染のリスクを減らす工夫をしておりますので、推奨の期間内に接種するように心がけましょう。